

校長室より

「天空高き」



第126号



令和元年10月4日

この感動を次のステップへ！ ー第11回楽学祭ー

楽学祭の開会の挨拶で私は次のようなお話をしました。

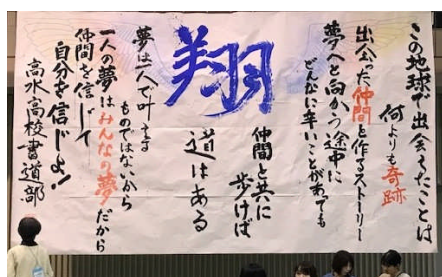
令和になって最初の楽学祭で、今年のテーマ、「Epoch～青春の花を咲かせよう～」のように、新時代に一人ひとりが青春の花を咲かせるためには、「One for all, All for one」、一人はみんなの為に、みんなは1つの目標を達成するために、仲間と力を合わせて、一人ひとりが、それぞれの役割を全力で果たすことが大事だ。そして、観覧する皆さんの姿勢や態度も、一人ひとりが青春の花を咲かせるためには大切だ」と。

2日間、ステージ上で、各会場で皆さんは素晴らしいパフォーマンスを発揮し、観覧した皆さんも瑞々しい感性でそれに答えてくれました。本当に、私は全校生徒の皆さん一人ひとりに、ありがとうの言葉と、私たちに感動、勇気そして希望を与えてくれたことに対して、深く感謝します。

このような経験はなかなか日頃の生活の中で得ることはできない、貴重な体験です。特に、多くの仲間とこのような経験を分かち合うことが、皆さん一人ひとりの人生を豊かなものにし、青春の花を咲かせることにつながるのだと思います。

平成最後の楽学祭が、10回という節目で終え、令和最初の年に、11回目を迎え、高水学園に新たな伝統を築きつつあることを確実に実感できたことは、高水学園にとっても私にとっても大きな喜びです。

感動は、感じて動くと読むことができます。皆さん一人ひとりが、この感動を新たな次のステップの糧にして、チャレンジしてください。



幸せや感謝や尊敬・責任感などは全部感じるもので、目にはみえません。目には見えないものを感じ取る力が「感性」ではないでしょうか。 芳村思風（哲学者）

10月の月間目標

静かに本を読む

令和元年度
チャレンジ目標

- 1 挨拶 先に明るく元気に
- 2 先を見据えた行動 5分前行動
・登下校のマナーに心掛ける
- 3 整理整頓
- 4 1%を誰かのために

爽やかな季節になりました。今月の月間目標は、「静かに本を読む」です。

ところで、10月に入ると次々に各分野のノーベル賞の受賞者が発表されます。今年も日本人の受賞者が出ることを期待したいですね。

2014年、史上最年少の17歳でノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんは、国連本部で有名なスピーチをしています。

「One child, one teacher, one pen and one book can change the world.」

（1人の子ども、1人の教師、1冊の本、そして1本のペン、それで世界を変えられます。）

一冊の本との出会いが世界を変えます。皆さん一人ひとりがそんな一冊の本に出会うことを期待します。

ラグビーワールドカップ日本大会 初のベスト8へー

9月20日、日本対ロシア戦を皮切りにラグビーワールドカップ日本大会が開幕しました。日本は見事に初戦を飾りました。

ところで、皆さんの中には、「なんでラグビーの日本代表には、こんなに外国人選手が多いの?」と、疑問に思っている人も多いでしょう。

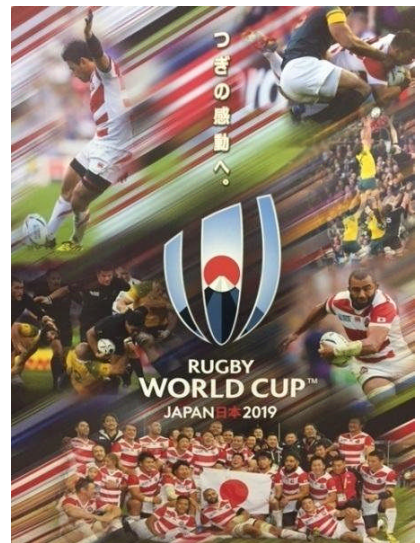
ラグビーはオリンピックやサッカーW杯とは異なり、ルール上、国籍がなくても、3年以上継続して住めばその国の代表になることができます。

ラグビーの各国代表の選手になるための条件は主に以下の3通りです。

- ①自分の出生国
- ②両親、祖父母の誰かが生まれた国
- ③3年継続して居住した国

「他の国の代表歴がなければ」という前提条件がつきますが、上記のうちどれか一つでも条件を満たせば当該国の代表資格を得ることができます。

現在、日本代表の外国出身の選手のほとんどは「日本に継続して3年以上住んでいる」という条件を満たして代表資格を得ています。これは日本にラグビー社会人リーグ「トップリーグ」があることが大きな要因になっています。高い報酬、安全で住みやすい環境、異なった文化を体験できるといったことから、多くの外国人選手がトップリーグでプレーしています。そして、日本で生活しプレーする過程で日本代表を目指すケースが多くなっているようです。



日本代表のリーチマイケル主将はニュージーランド（NZ）出身ですが、父親がスコットランド系、母親はフィジー出身です。高校時代に留学生として来日以来、日本でプレーし、2013年に日本に帰化しました。

日本代表選手にはリーチ主将と同じように、国籍を日本に変更した選手や日本語を流暢に話す選手、出身もNZ、サモア、トンガ、韓国、豪州、南アメリカ等と多様性に富んでいます。

ロシアとの初戦を終え、リーチ主将は今大会のキーワードを「多様性」であると、ある新聞社のインタビューに答えています。

約半数が外国出身選手のチームの主将として、原爆を投下されるなどの日本の歴史を選手に伝えてきました。「日本も外国人と仕事をする時代が絶対に来る。スポーツで、それができるところを見せたい」とも答えています。生まれも文化的な背景も違う仲間が、一つの目標に向かって突き進む姿を示したいという強い思いがあるようです。

「One for all, All for one.」、「一人はみんなのために、みんなは一つの目標を達成するために」仲間と共に体を張り続け、先頭に立って日本を引っ張っている、リーチ主将以下日本代表が、初のベスト8の壁を突破してくれることを期待し、応援したいと思います。

アリの足は6本。では、歩くときはどの足から？

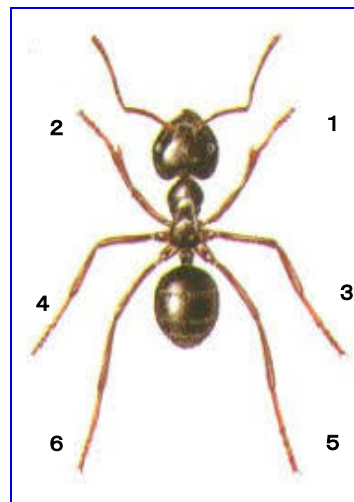
皆さんも知っているように、アリは昆虫の仲間です。コオロギも、カブトムシ、チョウも同じ仲間です。では、昆虫のからだの特徴は？

もうすでに習っているでしょうが、あらためて復習です。

からだは頭・胸・腹の3つの部分に分かれています。頭には触覚や複眼があります。胸には3対の足と2対の羽があります。（羽が退化してない場合もある）腹にはムカデのように足がありません。

では、問題です。

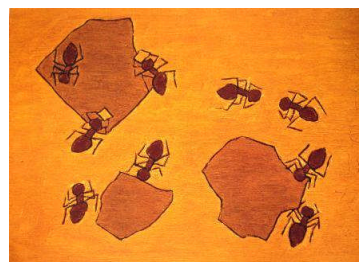
アリの足は3対、6本ありますが、歩くときはどの足から動かすでしょうか。右図に、右前足から番号を付けていますが、何番の足から動かし始めるでしょうか



地位も名誉（文化勲章を辞退）も欲せず、ただひたすら自らの求める独自の美学を貫き通し、「画壇の仙人」と呼ばれた熊谷守一（くまがいもりかず）画伯（1880年～1977年）がおられます。

熊谷画伯は52歳の時に東京都内に移り住み、亡くなるまで20年以上一歩も自宅から出ず、昼間はよく50坪弱の庭にいる虫や動植物をよく観察されていたそうです。

熊谷画伯の最晩年の姿を撮り続けておられたある写真家が、ある昼の時間に訪れると、庭にいる虫や動植物をじーっ



熊谷守一作

と見ていたそうです。延々と。その時、熊谷氏がその写真家に発せられた質問が、「アリはどちらの足から歩き始めるか知っていますか？」です。

その写真家は「そんなの分かりませんよ」と答えたそうです。そうしたら熊谷氏は「ちゃんともものを見ていないから、簡単に分からないなんて言えるのです。あなたは見方が足りない」とおっしゃったそうです。

では、あらためて皆さんに尋ねます。「アリはどちらの足から歩き始めますか？」

答えは、アリは左の2番目（番号4）の足から歩くそうです。

生物学的に実に理にかなった動き方をしています。

生物は、足の数に関係なく、体を安定に保ちながら移動します。昆虫は足が6本あります。体の安定を求めて、アリは三本の足をほぼ同時に動かし、あとの3本は止め、それを交互に繰り返して歩行します。三脚の原理に基づいています。その時の3本の足は、上図でいえば、4・1・5の足を同時に動かし、その時3・2・6の足は止めます。左側の真ん中の足（4）と、右側の前足（1）と後ろ足（5）で踏み出すときは、右の真ん中（3）と左の前（2）と後ろ（6）は、じっと止めて三脚（三角形）をなし、安定性を保ちます。

足の動きに関して、3本が同時だというふうに考えられていますが、安定を重んじて片方の2本が、反対側の1本より微妙に遅れることもあるそうです。つまり、真ん中の足が先に動く、ということになります。アリにも、利き足があるかもしれないので、左の真ん中（4）が一番先のアリもいれば、右の真ん中（3）が先に動くアリもいるかもしれないそうです。

熊谷画伯が観たのは、左の真ん中を先に動かすアリだったのでしょうか。

「ちゃんともものを見る」ということを常日頃から大事にしていないと、NHKの人気番組の「チコちゃんに叱られる！」のチコちゃんに「ポーっと生きてんじゃねーよ！」と叱られますね。

24節気

寒露（かんろ）10月8日頃

寒露とは、晩夏から初秋にかけて野草に宿る冷たい露のこと。秋の長雨が終わり、本格的な秋の始まりになります。この頃になると五穀の収穫もたけなわで、農家では繁忙を極めます。露が冷たい空気と接し、霜に変わる直前で、紅葉が濃くなり、燕などの夏鳥と雁などの冬鳥が交代される時期でもあります。

霜降（そうこう）10月23日頃

秋が一段と深まり、朝霜が見られる頃。朝晩の冷え込みが厳しくなり、日が短くなったことを実感できます。初霜の知らせが聞かれるのも大体このころで、山は紅葉で彩られます。コートや暖房器具の準備など、この頃から冬支度を始めます。読書や編み物をしたりして、秋の夜長を楽しむのもいいですね。

日本の行事・暦